

ライオンの“キング”の死因について

当園で飼育していましたライオンのオスの“キング”（15歳）が11月3日に亡くなりました。“キング”は2008年3月に2歳で来園し、成長を待って2010年3月よりメスの“クィーン”と同居を開始しました。“クィーン”が亡くなった後は2016年6月に来園したメスの“プリンセス”と共に仲良く暮らしていました。子供は出来ませんでしたが、のんびりした穏やかな性格で来園者に人気がありました。

“キング”は9月下旬より食欲が不安定になり治療を行ってきました。一旦回復するも、1か月程で同じような症状が出てしまいました。治療の報告などに対し、皆様からたくさんの応援をいただき、また今回もたくさんのお悔やみのお言葉を頂戴しました。以下に“キング”のこれまでの飼育状況と死亡原因についてご報告させていただくと共に、“キング”を応援し、大切に思ってくださいました皆様に心から感謝申し上げます。

1. 飼育状況

2008年3月より飼育を開始し、大きなケガや病気に見舞われることなく過ごしてきました。しかし、2018年11月に突然採餌不良に陥り、両後肢が麻痺して寝たきりになってしまいました。当時は血液検査などでは異常が見つからず、神経系の異常を疑いましたが、はっきりした原因はわかりませんでした。治療の結果、発症から約3ヵ月が経った頃に腰にふらつきはあるものの普通の生活ができるようになりました。（死後に行ったCT検査の結果、頸椎の椎間板ヘルニアが原因だった事が示唆されました）

麻痺から回復した後は、元気に過ごしていましたが、2021年7月28日に麻酔下でワクチン接種と健康診断を行ったところ、腎機能の低下など、いくつかの異常が見つかりました。それを受け、飼育と獣医師のチームで今後の治療方針や、トレーニングの課題、現状の共有などを行いました。9月下旬からは食欲が不安定になり、投薬で一旦回復しましたが、10月31日には食欲不振となったため、連日の点滴治療を行いました。しかし、状態は回復せず、11月3日の治療後にショック状態となり、その後死亡を確認しました。

2. 死因の推測

解剖検査を行った結果、膀胱破裂を起こしていたことがわかりました。排尿困難となった原因を精査しましたが、膀胱と尿道の左側に前立腺などの生殖腺と思われる20cm程の大きさの腫瘍が見られたことや、結石などによる尿道閉塞がなかったこと、死後に岩手大学で行った脳と脊椎（背骨）のCT・MRI検査の結果で神経的な排尿困難が否定できたことから、腫瘍が尿道を圧迫したことが、排尿困難から膀胱破裂に至った原因であると考えました。

また、死亡前の数日間に見られた嘔吐や食欲不振は、排尿困難による急性腎不全の症状と見られますが、解剖検査では腸管壁の肥厚などの異常も見られたため、腫瘍との関連も含めて岩手大学に病理組織検査を依頼し、原因精査を進めて行く予定です。

3. 経過詳細

2021 年

- 9 月 25 日 嘔吐あり、食欲 7 割程度、元気はあり、胃腸薬の経口投与
- 9 月 26 日 嘔吐なし、食欲 4 割程度、薬が入った肉は直接渡すと食べる
- 9 月 28 日 嘔吐なし、食欲 2~3 割程度、胃腸薬は継続
- 9 月 29 日 皮下点滴実施、血液検査で腎臓と膵臓問題なし、炎症の数値上昇
- 9 月 30 日 食欲戻りほぼ完食、胃腸薬は継続
- 10 月 2 日 少量残しあり、抗生剤とビタミン剤の経口投与を追加
- 10 月 4 日 食欲にムラがある、元気はあり
- 10 月 8 日 食欲あり、完食
- 10 月 10 日 食欲あり、完食、尿検査で潜血反応あり、抗生剤・胃腸薬等を継続
- 10 月 19 日 食欲あり、血液検査で腎臓問題なし、炎症の数値が下がり正常範囲、投薬終了
- 10 月 25 日 嘔吐あり、食欲はあり、よく食べる
- 10 月 26 日 嘔吐なし
- 10 月 31 日 嘔吐あり、夕方の食いつきが悪い
- 11 月 1 日 胃液の嘔吐 2 か所があり、食欲なし、皮下点滴実施、血液検査で腎臓の数値が上昇、炎症の数値も再び上昇、抗生剤・胃腸薬等を再開
- 11 月 2 日 嘔吐 1 回、皮下点滴実施、制吐剤を注射投与、腎臓の薬の経口投与を開始、排尿不明
- 11 月 3 日 嘔吐なし、反応が悪い、排尿確認できず
皮下点滴等処置後に座り込み、ショック状態となる。蘇生薬投与するが死亡

4. 個体情報

動物種：ライオン（愛称 キング）

性別：オス

年齢：15 歳

生年月日：2006 年 3 月 6 日

体重：185 kg（健康時）

頭胴長：180 cm

尾長 92 cm

肩高：119cm